

難民救援情報誌

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

—— 試 行 錯 誤 ——



- ハンディクラフトの織り手たち
- にほんごをべんきょうします

さまよいあるく人びと

地雷をふんで、大けがをしたのでしょうか、草むらによこになっていた女の人がチアたちを見ると、「チュイ・ボン(たすけて)！ チュイ・ボン！」と、よわよわしくうめいて、光のない目で、たすけをもとめてきました。

☆

ジャングルでは、虫がたくさんとれました。コオロギでも、昆虫の白い幼虫でも、サナギでも、見つけると、火もおさないで、口にいました。

実は小さく、にがく、青くさいのですが、野生のバナナをみつけることもありました。

☆

ある夜、草かげで、ふと目をさましたチアは、ジャングルの木ぎのあいだにゆれている、青白く光るものを見ました。

死んだ人のからだから、チロチロともえあがる鬼火でしょうか。それとも、人のたましいでしょうか。

チアは、つかれてねむっているおかあさんに、思わず、からだをすりよせました。

その青白い、チラチラとすきとおったようなものは、ゆっくりとゆれながら、ジャングルのなかをうごいていきます。よく目をこらすと、それは、ゾウのかたちのように、見えました。

(白いゾウよ！)

チアはおどろいて、たちあがりました。

空には、月がのぼっていました。まちがもなく、白いゾウだと思いました。白いゾウが、月あかりに、青く光って見えるのです。

おかあさんは、プアンをおこし、チアたち三人は、白いゾウのあとをあるきはじめました。

母子の白いゾウは、りんの光のようにあわくもえながら、木ぎのあいだを見えがくれて、まえへとすすんでいきます。チアたちをいたわって、わざとゆっくり、ゆっくりと、あるいてくれているようでした。

☆

三日めの朝のことでした。

ふと気がついたとき、チアたちは、タイの国ざかいの小さな川をわたっていました。

母子の白いゾウは、どこかにきえ、チアたち母子三人は、難民のむれにまじって、川をわたっていたのです。

だれかがさげびました。

「ここはもう、タイだぞ！ タイにきたぞ！」

「やせっぽちのチア

— カンボジアの少女の記録 —」より

11pをお読み下さい。

やはり“水”はすてきです

ミノダさんカンボジアからの便り

箕田健一：1951年生れ、海外ボランティアとして1978年スリランカへ。現在、JVCのメンバーとしてイギリスの民間救援団体OXFAMと協力しカンボジア国内で井戸掘りプロジェクトを進めている。

今までに二本の井戸を掘りましたが、二本とも成功しています。一つはプノンベン市のWorld Visionの病院でもう一つはタケオ県ネイナン市の病院。12月中にあと二本掘るつもりでいます。

私はここカンボジアでの生活を、意外と楽しんでおります。その反面とても厳しいです。ここで働いている人達はみな「プロ(専門家)」です。アマチュアは通用しません。私の場合、井戸掘りに関しては経験が少ないのでプロとは言えませんが、私の職工というか、機械技術者としての面が大きくカバーしてくれるので、なんとかやっています。また、スリランカを始めとする今までのボランティア経験も役にたっています。

そしてOXFAMがこの計画のバックにあることが大きな力になっています。

私のカンボジア滞在のビザはようやく一ヶ月がとれ、次の延長は仕事の進み方しだいということになっています。もしトラブルが起こればそれで最後です。慎重に、かつ大胆に仕事をして行かなければなりません。

後から来る人に期待することをまとめてみると、

1. 井戸掘り技術者と言うより、機械技術者でなければなりません。ここでは思ってもみない事が起ります。たとえばここにある井戸掘り機械に、日本から送られてきた部品が合わず、旋盤を使って機械の内径を大きくしなければならなくなったり、(すでにある)部品が不良で(作業中に)はずれてしまい、もう少しで大事故になるところだったこともあります。カンボジアのいなかに修理屋とか部品を取換えてくれる店があるはずはなく、自分の持っている知識と経験、判断力にたよる以外ありません。その他両手にあまる程のトラブルが起きています。今回のプログラムは機械あつてのそれですから、私がただの井戸掘り技術者ならばとっくにギブアップして帰っていたでしょう。

2. 海外でのボランティア経験者であること。現地の人、共に働くメンバーと、良い関係を保ちながら仕事をしていく為には、彼らを理解した自分を相手に理解してもらおうという気持ちを絶えず持っている人でなければうまくゆきません。自分の価値観、相手の価値観をそれなりに理解するには、日本以外の社会で暮した人でないと、彼らの中に溶け込むのに時間がかかってしまいます。ここカンボジアでは、その為に使う時間などとれないのです。

3. 自分自身の意見を持っている人、自分を自由にコントロールできる人、そうでないと疲れきってしまいます。カンボジアのいなかと、西側の援助団体の間で、大勢の年上の人達とうまくやっていくためには、やはり30才以上の人が望ましいでしょう。

4. 語学のできる人。私の一番弱い部分です。できれば英語・仏語を自由にあやつれる人。私の場合はかろうじて最低線ギリギリでやってゆける程度です。

つき合いの面ではともかく、仕事の面では言葉の行き違いで誤解が生じやすく、訂正するのにひと苦労です。

話は変わりますが、やはり水はすてきです。ここにいる間はいい仕事をするよう頑張っています。OXFAMの人たちも皆いい人で、わりとのんびりと仕事が出来ます。ではまた書きます。'82. 12月5日



ただ今、試運転中。きれいな水は、カンボジアの農村の衛生状態を少しずつでも改善するだろう。

ハンディクラフトの織り手たち

ウボン織物学校

●織物学校のこと

若いラオス難民の女性たちに、長いキャンプ生活の中で伝統的な「織り」の技術を身につけてもらおうということで織物学校がつけられた。3年以上もキャンプに住んでいる人々はほとんどが、特別の技術を持たない農民たちで、第三国への定住も希望せず、希望しても難しい状態にある。この人たちは早く平和が戻りラオスに帰ることを望んでいる。織物を学ぶことはラオスに帰った時にも収入を得る手だてともなるであろう。

JVCは開校までも難民の女性たちが織ったハンディクラフト（手工芸品）を買いあげて、バンコクや日本で販売してきた。彼女たちの収入となるだけでなく、一部はJVCの活動資金に還元し、より多くの人々に難民のことを知っていただくために役立っている。

織物学校の建設、運営の資金は伝統文化を尊重する茶道の裏千家のご協力をいただいた。裏千家からのご注文で、点前に使う服紗をウボンで織っていたこともある。

織物学校では13才以上の女の子たちが難民のおばさんたち（先生）のもとで学んでいた。織り始める前の綜統（そうこう；縦糸を上下するしかけ）作りから始め、簡単な平織りから、ししゅう糸を用いた複雑な紋様織りまでを習う。美しく織り上げることが目標になっているが、根気のいる仕事であり、糸が良質でないためによく切れるので苦勞している。

また、織物学校の生徒の半分以上が、ラオスで教育を受けておらず字が読めないのので、ラオス語を教える時間を設けたり、月に一度の割合でお坊さんを招いてお説教を聞く場を持つことにした。



綜統作り。織り上げるまでには長い時間が必要だ。

●難民の女性たち

彼女たちは、キャンプ生活という限られた環境の中でもたくましく生きている。毎日の水汲み、調理、洗濯、子育てと、よく働く。しかし若い女性や幼い少女にとって、ここでの生活は明るいものとは言えない。思春期から大人へという、女性として大切な楽しい時期を、難民としてキャンプで過ごさなければならぬ。女性であるがゆえの苦悩もある。織物学校の生徒たちは、キャンプを見張っているタイの兵隊を恐れていた。難民の女性が襲われることがあるという。キャンプへ収容されるまでも、危険な目に合うケースが多かったことであろう。祖国が平和であれば、彼女たちの青春もかなり違ったものであったろう。

織物学校は、彼女たちが集まり、笑い、話し合い、ラオス舞踊を踊り、いろいろな行事に参加する中で友達を得る場としても意味をもっていたのではないかと思う。

クン・メーのこと 織物学校の“お母さん”

1980年前半にJVCがウボンキャンプで活動を始めて以来、ハンディクラフトを手伝ってくれていたリエン・ケオサイさん、56才(写真上)。彼女はラオス織りのすばらしい技術を持っている。彼女には軍人の夫と5人の子供がいる。長男(25)と三男(14)はラオスにいる。次男(20)はアメリカへ定住。長女(17)は日本人と婚約し、日本に定住するためにキャンプを出た。次女(12)だけが手もとに残った。

彼女たちがラオスのパクセ村を出たのは'78年の5月。近所の青年たちが коммуニストに殺されたのを見て、恐しくなり出てきた。新政府下のラオスでは、田植えなどの強制労働にかり出され、夜明けから夕刻まで、病人や妊婦でも休まず働かされたという。毎晩集会に出席しなければならなかった。国を出ようという気持ちは常にあったという。その時手もとにいなかった2人の息子を残し、徒歩で山を越え、タイ領に辿り着いたのは2日後だったという。

彼女は多くの人々から「クン・メー(お母さま)」と親しみをこめて呼ばれている。血縁関係のない人も彼女をそう呼ぶ。彼女の家にはいつも何人かの若者が出入りし、休んだり食事をしたりしている。クン・メーはラオスにいた頃から、親のない子や貧乏で食事もなくにとれない子の面倒をみてきたという。「自分が助けられるくらいのことならしてあげたい。」と彼女は言う。世話になっている子供たちも皆よく働く。彼らが第三国へ定住するためにキャンプを出て、パナニコムへ移った後でも「元気であるか」「お金は足りているか」と心配し、手紙やお金を送る。そのお金はクン・メーが機織りで稼いだお金だ。

日本で売られているJVCのラオス織りのハンディクラフトは、ほとんどがクン・メーのところから

来ている。彼女のところではいつもたくさんの織り子が出て、多い時には17~20名を数えた。もともと技術のあった人もいるが、クン・メーの所で上達した人も少なくない。中には、夫を目の前で殺され、少し頭がおかしくなってしまった女性もいて、クン・メーは彼女にも織り物を教える。子供を3人かかえている母親が、乳飲み児をそばにおいて織る。夫が行方不明だという女性もいる。上手に織れない人は熟練者のアシスタントとしてそばにつき、腕を磨いていく。クン・メーは、ハンディクラフトの売上げ金をこのような織り子たちに分けていた。織れなくても、織り手を手伝ったり、子守りをした報酬として。



クン・メー(上)と織物学校の生徒たち(下)

ウボンの閉鎖が近づくなかで「ラオスには帰らないの。」と聞くと、「今は帰りたくない。でも平和が戻ったら、必ずラオスに帰る。」と彼女は答えた。今でも国境やラオス国内では、新政府軍とゲリラの戦闘が続いているらしい。

'82年12月15日、'75年以来続いてきたウボン・キャンプがタイ政府の方針にもとづいて閉鎖された。'80年夏頃の2万人近くがひしめき合っていた面影はもうない。閉鎖後はラオスへの帰還を希望する人達を待機させる場所として、キャンプの一部が残される。クン・メーのように、今は帰らないという人々は12月上旬までにバナナポという別のキャンプへ移される。そこでは外国人の救済団体の活動がまだ許可されていない。私達が再び、たくさんの娘たちに機織りを教えるクン・メーの姿を見ることが出来るのはいつの日だろうか。

にほんごをべんきょうします

—日本定住に希望を託して—

伊藤千鶴子さんインタビュー

JVC は、パナニコムの第三国定住希望者のための一時収容施設で図書館活動、スポーツ・工作などのレクリエーション活動を行ってきました。'81年の8月からは、日本への定住希望者のための日本語学校を始めました。

Q. 伊藤さんは、その日本語学校の先生をやっていたわけですが、いつからタイへ—?

A. 今年の4月から11月までの半年間おりました。日本語学校は、1コースが12週間です。私は第4期・第5期の生徒を教えていました。

Q. 授業はどのように進められているのですか?

A. 私が大人のクラスを持ち、アシスタントの方が子供クラスを担当、6月からはコーディネーターの方が助けてくれました。一日の授業は60~90分です。その後30分~50分はLLシステム(テープレコーダーを使った反復練習機器)で自習します。テキストは、「にほんごのきそ」を使っています。タイ語版、ベトナム語版はあるのですが、ラオス語、カンボジア語のものはなかったのので、この日本語学校を始められた平賀増美先生達が翻訳をして作りました。手書きのがり版刷りでサケオキャンプの曹洞宗の印刷機をお借りして刷りました。

Q. 生徒の数はどのくらいですか?

A. 日本定住希望者の全員を引き受けるので、人数はまちまちですが、第3期の終了者は77名でした。難民の人達が希望する定住先は、アメリカ、カナダ、フランスなどが多いです。地方にあるそれぞれのキャンプから日本定住を希望して、パナニコムへやってきた難民は、ここで日本政府の面接や審査を受けてその結果を待つわけですが、申請が受け入れられず日本へ行けないことがわかってやめていく生徒もいます。

難民たちの多くは複数の国に定住希望の申請をしていますが、日本の手続には時間がかかるのです。

Q. 難民達は日本をどう思っているのでしょうか?



パナニコム日本語学校の授業風景

A. 同じアジアの中では、たいへん開けているということで、日本に親近感と憧れを持っている人達が多いようです。けれど、日本の現実を知っているわけではないのです。スライドなどを使って日本の生活を紹介しているのですが、たとえば電話のかけ方、自動販売機、都会の人ごみ、乗物の利用などにとまどっているようです。

Q. 難民達からはどんな印象を受けますか?

A. 一般に落ちついているという感じです。第三国へ行くという希望があるからでしょうね。とくに若い人は、目標がはっきりしています。第三国へ行って、一生懸命働いて、お金を貯めて、そしていつかは国へ帰りたいというぐあいに——。ただ授業の中で、家族のことを聞いたりすると、両親がなかったり、兄弟の消息がわからないという答が返ってきて、やはり大変な経験をしてきた人達なのだと思うこともあります。生徒は20~30代の若い人が多いのですが、50以上の人もいます。年配の人達の中には、学校に行ったことがなく母国語の読み書きができない、という人がいるんです。それは女性の方に多かったですね。

Q. 子供達は?

A. やはり学校に行ったことがない子供達が多く、

は私、日本にきて半年たちました。でも、勉強ができません。日本語が読めなくて、仕事もできません。家族8人を養うために、毎日働くのですが、時間がなくて、勉強ができません。漢字が読めなければ、書類が読めず、単純作業以上の仕事はもらえない、という悪循環に陥る。

第4期生の「さくぶん集」より

時計の読み方がわからなかったり、算数がわからないという子供達もいました。

Q. 伊藤さんが日本で教えていた外国人と何か違いを感じましたか？

A. 教え方は変わりませんね。方法は同じです。ただ、これまでは英語でわからないことを説明することができたのですが、難民の人達の場合は、すべて日本語だけでやっています。華僑系の人達は漢字の意味がわかるので、理解しやすいようです。

Q. 彼らの勉強ぶりはどうですか？

A. まじめですし、意欲的です。一度注意したら授業に遅刻するような生徒もなくなりました。宿題や復習をするといっても、センターの中は、あまり落ちついて勉強できる環境ではないんです。難民達は、狭いところに大勢が共同生活をしていて、机や椅子があるわけなし。それでもちゃんと勉強しているんです。JVCの図書館を勉強場所として開設していて、日本に関する本なども見られるようになっています。

Q. 最後に――

A. パナニコムの日本語学校で勉強した生徒達が、次々と日本へやって来ています。定住センターから就職先が見つかりそうだという日本語の手紙をもらいました。そういう手紙は大切にとってあります。

パナニコムで難民の人達に接したことは、本当に良い勉強になりました。これからは、日本定住希望の一時滞在の難民のために日本語のお手伝いを続けたいと思っています。

日本にきて半年たちました でも…

朝7時に家を出て、バス、電車、バスと一時間近くかけて会社に通うタンさん（仮名）の姿には日本人として生きていくたくましさを感じさせる。

彼は今年、日本にきたばかりである、31才、働き盛り。カンボジアにいたころは、英語、仏語、タイ語、ラオス語を話すことができたが、こちらにきてからは話す機会がなくほとんど忘れてしまった。仕事も漢字が読めないために単純作業しかできない。話す機会はますます奪われる。

会社の人はよくしてくれるが、家族8人を養うために休日も働く、働けば時間がなくなる、そうすると日本語、特に漢字の勉強ができない。漢字が読めなければ書類が読めず、単純作業以上の仕事はもらえない、という悪循環に陥る。

日本人として生きていくために覚えた日本語が生かされない。勉強しなければという気持ちだけがつのる。どうすればいいのか。

今、ボランティアや近所の人たちの協力で多少の勉強はできるようになったが、まだ物足りない。

何事も明るく笑いとばすタンさんの表情に時折、暗い影が走るのは気のせいではなさそうだ。

日本に定住している元難民、これから定住しようとしている難民にも、これらの問題は多かれ少なかれ関わってくるだろう。



小田原市に定住したラオス人 撮影：押原 譲

JVCプロジェクト

1982年12月28日現在

●実施中 ○終了 ■出資者 □担当者 ※リーダー

ウボン（ラオス人キャンプ）キャンプ閉鎖後、各プロジェクトとも終了

○自動車整備学校

12月15日のキャンプ閉鎖に伴い、11月中旬より多くの難民たちがバンナボ・キャンプに移動し始めたので、生徒が全員卒業できるように、一日の授業時間をふやし、卒業に必要な授業時間数を得られるようにした。残った時間は、難民の先生たちがバンナボに行ってから技術学校を開設するために、みんなでそこで使う教材づくりをする予定。

○石けん学校

10月26日、シャンプーの研修のためバンコクにある泰国花王実業を訪れた。それによると、シャンプーは石けんと異なり、近代的で複雑な機械を使用するのみでできる化学製品であることがわかった。石けんに関して今後の予定は、大量生産できるところまで続け、あわせて教科書もどんどんストックをふやしていくことである。

○図書館

難民のバンナボ・キャンプへの移動開始と共に、図書館の利用者も日毎に少なくなっていた。主な利用者が子供たちであるため学校の閉鎖と同時に図書館も閉じた。今後UNHCRとの協議の上で、これらの本の利用方法を検討していく。

○織物学校

11月26日現在、先月まで40人いた生徒も12人になった。バンナボ・キャンプへ移動してもウボン・キャンプで習得した技術を生かして身近にある竹を利用して機を作り、場所は違っても織り始めているようである。10月から新しい試みとして、実際に養蚕の過程、紡ぐ技術共にみせることができた。

給水プロジェクト（東北タイ農村での井戸掘り、貯水タンクづくり）

■モラロジー □木村信夫※、スラボン、ルーチャイ、佐藤正喜

- 1982年12月末で7か村合計21本の浅井戸を完成させたが、村人に好評である。問題としてはポンプに関するもの、地域によって全く違った様相を呈している水質の問題、村人のコミュニティー発展がどうなっていくのかなどがある。来年1月以降の活動の中でそれら問題に対しての質的向上をはかっていく必要に迫られている。

農村開発プロジェクト □山本敏幸、他の10名

- タイのラムカムヘン大学の農村開発全タイ部と共に11月15日から12月6日までタイ東北部、イサーン地方で農作業の手伝い、教育活動、図書館建設などを行った。

カオイダン（カンボジア人キャンプ）

■UNHCR、千葉県□嶋 紀晶※、田原勝幸、佐藤和美、トンディ、清水洋子

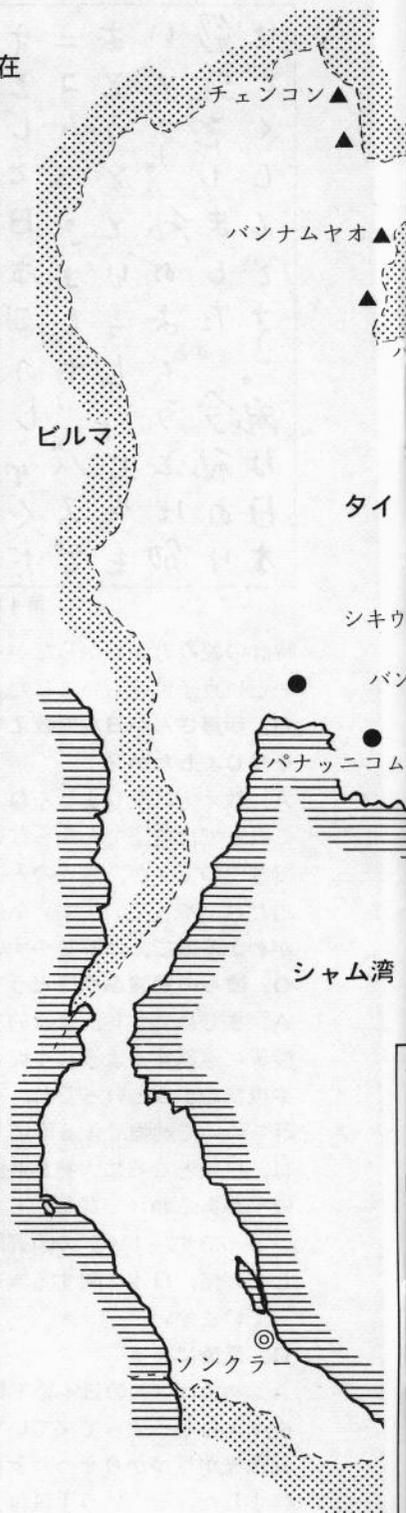
●自動車整備学校

11月9日より11月コースが95人の生徒（内障害者3人）を迎えて始まっている。また21日より1ヶ月の予定で、当学校における教師の技術向上をはかるために土曜日の午後と日曜日を利用して、自主訓練を始めている。この教師の自主訓練は今後も定期的に行っていきたいと考えている。なお、来年度よりJVCがInternational Rescue Committeeのテクニカルスクールを引き継いでいくことになった。

タケオ（カンボジア国内） ■OXFAM、LWS □養田健一※

●井戸掘り

プノンベンの世界ビジョン病院とタケオ県ネイナンの病院の2本を掘った。今月中（11月）にあと2本掘る予定。





パナニコム (第三国定住待ちの人達の一時収容施設)

●日本語学校 ■千葉県□谷沢一江※, 加島伸彦, 佐久間正一, ティアン
 11月5日に第5期生88名が終了, すでに予備クラスでひらがなを学習していた6期生の授業が始まる。(12月9日パナニコムから29名が日本に到着。大和定住促進センターで勉強に入っている。) 12月20日から24日まで日本の定住調査団が来訪し, 108名の定住許可の内定をした。83年の日本語学校の運営について天理教千葉支部のご支援が決まった。

○レクリエーション
 '82年いっぱい, パナニコムのレクリエーション活動はSave the Children Fund (アメリカの民間団体)に引き継がれた。これまで行われてきた主要な活動は, クメール青年図書館, 子供図書館, ラオス子供図書館, 子供図書館でのスライド・フィルム上映, 折紙や紙工作, スポーツ用具の貸し出しと毎月のバレーボール, サッカー, 卓球大会, ラオス・クメールの民族舞踊のクラスと, ダンスやコメディのショーの催し。

タイ・カンボジア国境

○教育援助
 WFP (世界食糧計画) / UNBRO ※の傘下でカンボジア国境の難民村4ヶ村において, 教育物資の供給および学校運営全般にわたる援助活動を6ヶ月間に渡って行ってきた。内容はカンボジア語の読み書き, 算数という基礎的なことを重視し, 授業, 学校運営のあらゆる責任と決定権はカンボジア人にゆだねた。就学率の向上, 学校の設備の改善, 教育内容の充実と, 成果も上った。'83年は国境全域の難民村での教育プログラムが, WFP / UNBROに引き継がれることが決定した。

●医療プロジェクト ■日本青年会議所関東支部, WFP □星野龍夫※, 多田正毅, 柳 茂行, 岡崎正己, 金子一弘
 11月中旬日本から医師, レントゲン技師, コーディネーター (調整員) が到着。これに, 調整・安全対策係とクメール語通訳を加えて移動レントゲン診療チームが結成された。機材の通関を待って現地を下見し, レントゲン撮影場が選定され, 12月第4週に試験的に撮影。優れた写真が撮れた。第5週から各病院を廻り, リクエストに応じて作業を進める。1月にはタイ被災民に対するレントゲン活動を始める。WFP / UNBROのバンコク, アランヤプラテート両オフィスとも非常に協力的であった。

クロントイ・スラム (バンコク市内のスラム)

●電気工養成所 ■一般寄付□福村州馬※, 高塚政生, ブラキット, 小川ひとみ, 釘村千夜子
 第5期生11名が12月5日の実習をもって終了。筆記試験合格者6名, 実技試験合格者5名であった。かねてから申請していた電気工研修所プロジェクトが許可され, 準備に入った。その主な目的は, 養成所の終了生に職場を与えること, 運営資金を生み出すことである。

●図書館 ■神奈川県
 ●奨学金援助 ■モラロジエ
 タイ住宅局のスラム改善事務所と話し合いを持った。もし協力関係ができれば, より多くの貧困児童の学資援助が可能になろう。

バンコク事務所

運営 ■裏千家, 西本願寺
 □熊岡路失※, 深津高子, 田川和子, 武田恵治, 峰野美智子, カモン, ポンビモン, 大野直樹, 松本一仁, 竹内俊之, 寺島正一, 滝沢文男

会計 上田辰子, 磯村美和子
 総務 深谷範子, 吉川万里子, 海老原美子
 ハンディクラフト 木上伴子, 金子雅子
 編集 碓 知子, 岡崎律子

東京事務所

□星野昌子※, 田島 誠, 荻野美智子, 他15名

(キャンプ人口 12/20現在)

カンボジア人	74,471 人
バンケン	17,506
カオイドン	31,223
その他	25,742
ラオス人	75,652 人
バンナボ	15,837
ウボン	3,853
その他	3,667
山岳民族	
バンビナイ	33,117
北キャンプ	18,134
その他	1,044
ベトナム人	8,503
シキュー	7,192
その他	1,311
トランジュットセンター・ プロセシングセンター	30,230
総計	158,626
ボートピープル	7,958
ランドピープル	150,668

※ United Nations Border Relief Operation



UNHCR ニュース

● 国連難民高等弁務官駐日事務所提供

“インドシナ難民の危機は続く”

UNHCR本部が毎月発行している“RERUGEES”誌は一面の論説でこう掲げている。「インドシナ難民問題は以前ほど急迫したものではなくなっている。しかし今なお、人々は小舟に乗って危険な航海に乗り出し、又は陸路苦しい旅に出てタイへ流れ込んでいる。そして東南アジア全体で195,000人の難民が、キャンプ生活を送っている。」と援助の継続を訴えている。

● 難民に厳しいカナダの失業問題

ホアンさんはカナダに定住した38歳のベトナム人。3人の子供の父親である彼は機械部品の製造工場で働いていた。ところが不景気のために工場が閉鎖され、失業した。1980年にカナダに来てから、レストランで働いたり、夜警などをしながら英語を学び、ようやく就いた仕事であった。彼はベトナムでは薬剤師として厚生省に勤めていたこともある。

難民の受け入れに積極的なカナダには現在8万人のインドシナ難民が定住している。3万5千人のインドシナ難民が定住した、'80年当時の失業率は7.5%程度であったが、'81年には不景気のため12.7%となり、さらに増えている。そして難民の失業率はその3倍である。理由は、人種的な問題や能力の問題ではなく、難民たちの多くが技能を必要としない職種についているため、まっ先に整理の対象となり、再就職も難しいからだ。ホアンさんは失業手当を受けながら仕事を探している。「生活は困難だが、難民キャンプよりはましだ。」と彼は言う。

104万人の失業者を抱えるカナダ('80年の人口2,390万人)は、'83の難民受け入れ枠を縮小し12,000人とする。その内訳はインドシナ3,000人、東ヨーロッパ3,000人、ラテンアメリカ・カリブ2,000人、アフリカ1,000人、中東800人、不測の事態のために2,000人となっている。これらは連邦政府の予算によるものであり、民間のスポンサーによる受け入れはこの枠外にある。'82年の始めから9月までの間に民間の1,796のグループに受け入れられた難民の数は3,591人。

エルサルバドルの内戦などのため政情が不安定な中央アメリカでは、大量の難民が発生し各地で問題となっている。主なところだけでも、1982年8月現在エルサルバドル難民がグアテマラへ推定10万人、メキシコへ12万人、ニカラグアへ22,000人、ホンジュラスへ17,000人。ニカラグアのインディオ、ミスキト族難民が、ホンジュラスへ1万人。グアテマラ難民がメキシコへ1万人などとなっている。

● ベリーズの開発と難民の定住

中央アメリカのベリーズ(旧英領ホンジュラス、1981年独立)で農業と畜産による開発プロジェクトが実施されている。これは、ベリーズ川狭谷の森林地帯で、ベリーズの農民とエルサルバドルからの難民が共に開墾を行うものである。('81年以来、数千人のエルサルバドル難民がグアテマラを通過して流れ込んでいたが、難民の存在は人口わずか15万人のこの小国にとって負担となっていた。)この計画はベリーズ独立以来最も重要な開発プロジェクトである。UNHCRが100万ドルの予算援助を行ない、ベリーズ内務省の難民救援委員会の監督の下、カトリックのメノナイト教会によって実施されている。'82年3月に最初の24家族がそれぞれ20haほどの土地に入植した。彼らは作物の種の配給や資金の融資を受けている。ベリーズの農民と難民たちは新しい共同体の中で良い関係を作り上げている。

“難民と開発”

“……UNHCRは開発専門の機関ではない。しかし難民への緊急援助をすることによって、難民流入が庇護国の開発を防げないよう努力している。また、難民達が身体的・心理的・社会的打撃から立ちなおり、「開発」に貢献できるようにしたいと考えている。つまりUNHCRのプログラムは、開発促進の要素を持ちながらも、あくまでも難民を主体とし、難民救済が第一の目的である。そして難民達が庇護国の生活に参加することによって、長期的にはその国の開発に協力できるのである。” UNHCR副難民高等弁務官のW. R. スマイザーの講演より。

「やせっぽちのチア」

ほるぷ出版 1100円

(見返しに内容の抜粋)

難民関係の本が種々出ている中で、今度カンボジア難民の女の子を主人公にした、小学生中・高学年向けの童話が出版された。

主人公のチアが7才の誕生日をむかえる直前、チアの家族は黒い服の兵隊たちにブノンペンを追われる。強制労働と戦火の中で飢え、病み、そして撃たれてチアの家族は死んで行く。一人ぼっちになったチアがジャングルの中で助けられるまでに5年近くの歳

月が流れていた。難民キャンプでチアに出逢ったU NHCR(国連難民高等弁務官事務所)のミンジャさんがあとがきで述べている様にこの本の内容は「私達の世界の荒々しく残酷な現実を描いてはいるが、しかし同時に、素晴らしい愛と友情の心暖る物語となっている。」この本はミンジャさんの話をもとに、社会派童話作家の手島悠介さんがまとめたものだが、二人は印税を全額、難民救援に寄付する。

Books 紹介コーナー

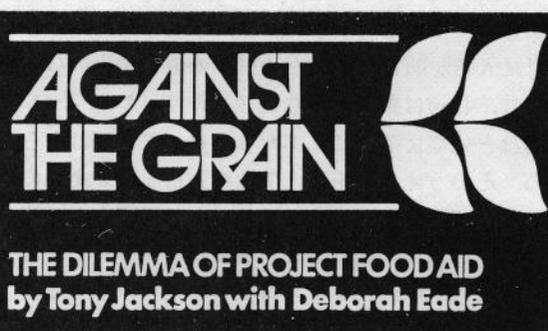
著者のトニー・ジャクソンは、イギリスの民間救援団体、OXFAMの現地ボランティアとして、1976年グアテマラの大地震直後、緊急援助活動をしていた。当時、グアテマラでは前年の豊作で食糧が沢山あったにもかかわらず、天災が起きたために国際的な食糧援助が届きはじめた。そのため食糧が余って、穀物価格が低下し、農民の生活はよけいに苦しくなった。

著者はこの「有害」とも言えるつくられた援助に対する疑問をもとに、世界各地で活動している現地のボランティアの体験談を集め、実状にそぐわない援助の実例をこの一冊の本にまとめた。

国際食糧援助の70%は、発展途上国の政府に渡されている。しかしこれは国内の中流階級や軍に売られて、政府がその収益を得ているのが実状だ。あとの30%が純粋な食糧援助であり、プロジェクト・フード・エイドという制度のもとで行われている。これはWFP(世界食糧計画)、CAREおよびCRS(両者ともアメリカの民間団体)によって行われているが、10%は緊急援助、残り20%は開発と結びつけられている。後者は開発事業の労働者に賃金として食糧を渡す形と、保健所や学校を通して、最も栄養を必要としている母子に食糧を配給する形の、2つがある。

プロジェクト・フード・エイドは、「南の国の開発にとってなくてはならないもの」と賞賛されてきたが、実際はどうであろうか。

たとえば、開発事業の労働者に食糧を支給する方法が、現金を必要としている彼らの労働意欲をそい



でしまう結果になったり、学校給食を通じて配給しようとしても、就学率が低いために、本当に食事が必要な子供たちの口には入らないという結果が出ている。

ところが、上記各機関の本部では、現地のニーズを把握した現場ボランティアの報告がとりあげられず、アメリカやEECの余剰食糧をどう処分するかといった本質的ではないことが目下の重要課題になっている。

食糧援助、特にプロジェクト・フード・エイドの矛盾を暴くこの一冊は、「人道主義的立場からの援助であれば有効である」と思い込んでいる私達に大きな疑問を投げかけている。

OXFAM発行 1982年
英文 132p. £ 4.50



タイ農村プロジェクトに 参加して…

石川 武

☆タイの地域開発へのアプローチの一環として、JVC はタイのラムカムヘン大学の農村開発ボランティア活動に参加させてもらうべく準備を進めてきた。

1982の11月20日～12月10日と12月11日～30日、それぞれ数名の日本人ボランティアがタイ人学生と共に農村に入って生活を共にした。主な活動はサーラーと呼ばれる村人のための集会所兼図書館の建設、子供の玩具づくり、井戸の補修など。

全体の総括は次回にゆずり、以下第1回目グループの参加者の体験談を紹介したい。(編集部)

話せるタイ語はわずか10語程、不安と期待のうちに村に入る。前日の雨のため村への道は泥沼になっており、私達は乗っていたバスを押すはめになった。

陽はとっくに落ちて、あたりは真っ暗、下はどろどろ、そのうえバスを途中で放棄し村まで6キロの道のりを2～3時間歩き村に着いたのは夜中の1時。

体力的にも精神的にも疲れ果てグッタリしている私たちとは対照的にタイ人は女の子もケロツとして

いる。
こんな状態で入ったドンムーイ村はタイ東北部、俗にいうイーサーンでも北タイ部の方に近いチャイャブーン県プーキャオ郡のベット地区に位置する。この村は貧しいプーキャオ郡の中でも最も貧しい村の一つで、赤貧という形容があてはまる。電気はもちろんないが、村の人口273人43家族でトイレ3ヶ所、井戸3ヶ所、トタン屋根の家は高床式で壁はない。雨水貯水用スチールタンク所有者が3割を切るという現実である。周囲は田と林だが建築用の木は少なくタキ木や炭にしか使えない。副収入を得るために炭を近くの町に売りに行ったりしている。

次の日から早速、JVC から参加の山本ボランティア他3名うち女性1名とタイのランカムヘン大学農村開発プロジェクト100名程と村人273人の共同生活が始まった。各々一家族に7～8名の学生がはいる共同生活である。

昼間は30度の暑さだが、朝晩の冷えこみはかなり厳しく、長袖シャツの上にセーター、ブランケットをかけて寝るという様子で朝は吐く息も白い。それでも村人達は、陽が昇る5時前から起き出してざわ

ざわしている。6時頃から空が白み始め、子供達の声が交る。たき火を囲んで雑談の一時を過ごしている頃学生達が起きてくるが、日本人は最後まで毛布にくるまっていて、学生に突っつかれてやっと起きる。それから8時の集合まで、炊事、掃除、食事をすます。この間、キャンプの始まる前につくったトイレへの道は銀座通りとなる。男子用4つ女子用3つのトイレの前で並びながら交す朝のあいさつもなかなか良い。

8時の集合時間に遅れると罰ゲームで歌か踊りをやらされる。約40分の歌で始まり終了するミーティング。ここではその日の仕事の説明、注意があるが大半を歌がしめる。9時15分頃、仕事が始まり12時には各家庭から持ちよったカオニャオ(もち米でつくった主食)おかずを広場でみんな一緒に食べる。これは胃にもたれるので、日本人は4日間くらいトイレに行く必要がなかった。そして2時まで昼休み。3時30分仕事終了。夕食までの間、バレーボール、サッカー、歌をうたったり自由な時間をすごす。学生達とは歌や踊りで接触をはかったが体がついていかない。それから夕食、水汲みなどの家事手伝いがあり、夕食は大体6時～7時半、その後11時の就寝時刻まで家ごとで交流をする。同時に5～6軒も招待されて困ったこともあった。



タイの学生に混って稲刈りを手伝う石川ボランティア



そんな日々の中で、メー（母への敬称）の出産があった。夜中、なぜかあわただしいと思ったら近所のメーが4～5人集まり、子供達も起きている。メーの苦しそうな声が2時間位続き、ついにオギャーッと。

村の人も学生達も喜びの声、夜中の3時頃であった。なんとその家では6人目の息子。娘が一人もないポー（父への敬称）は「娘がほしい」とポツリ。

それにしても高床式の板の間で子供を生むメーの強さに感心。

ある日曜日、共同生活をしている家のポーと町へ炭売りに行く。耕耘機を大きくしたような車（ロットクンテン）に炭を積みピクニック気分で町へ向かった。15キロの道のりはつらかった。道が良くないため、すさまじい振動、その上固い椅子なのでお尻に激痛。途中、何度となく自転車に追い抜かれ、しまいにはタイヤに異常。9時に出て帰ったのは夜7時、往復30キロしかないのに。

でもこのことがきっかけで、ポーとよく話すようになった。

そんな3週間はあっという間にすぎ、別れのバスに乗った私達に村人達が「チョーク・ディー」（元気でね）と言いながら泣いている。私達も、自然に涙が流れ「コップンカ」（ありがとう）という声がふるえて言葉にならない。また来るよ、心の中で誓う。

この活動はJVCとして初めての体験であり、今まだ多くの不備点が残されているが、農村開発プロジェクトのワク内にとどまらぬ日本人とタイ人、そして同じタイ人内部の連帯の輪のはじまりとしてひとつの礎になったと思う。

● 御所にJVCの日本語学校

日本以外の国への定住を希望しながらも、日本へ上陸したベトナム難民、すなわち一時滞在難民は1982年には2千人を突破している。日赤、カリタス・ジャパン、天理教、立正佼成会の民間4団体が全国29ヶ所の収容所でその世話にあたって来た。一方彼等が定住を希望する国々の受入れ状況もきびしく他国へ渡る望みも無い。この人々に現状を理解させ、自発的な日本定住へ向けさせるための日本語教育・オリエンテーションの必要を関係各所が痛感して久しい。JVCも昨春から天理教、カリタスジャパンのご協力を得ていくつかの施設を訪れプロジェクト実施の可能性を探ってきたが、民間4団体・難民事業本部・UNHCR間の調整を経て、このほどカリタスジャパン所属の奈良県「御所」収容所において実施の運びとなった。クラスの定員は約60名、開校は2月1日。第1期2月1日から4月30日、第2期5月1日から7月31日、合計6カ月にわたって行われる。教材は姫路定住促進センター使用の「日本語入門」にあわせて、このプロジェクトのためにベトナム語で用意されたドリル用ワークブック・チャート・用語表等を副教材として用いる。担当教師は平賀増美・伊藤千鶴子がつとめ、他に2名の助手が活動する。基礎授業、週15時間（月～金の午前3時間）、応用（午後2時間）、クラブ活動1時間、自習2時間が予定されている。

これによりJVCは、これまでタイ国で行ってきた日本定住希望者（定住促進センターを経て定住）への日本語教育と、国内に一時滞在する難民の直接定住のための日本語教育の双方を行うことになった。日本政府の難民の定住受け入れ目標数（3,000名）に顕著な増加がない限り、行先のあてのない一時滞在者に対する定住促進へ緊急の必要性が移行しつつあるととらえている。かねてから望まれていたJVC帰国ボランティアの国内難民問題への取り組みの糸口となることを希望している。

写真展の感想文から

※全国を巡回している、写真展「インドシナからやってきた子供たち」が、昨年11月25日～30日宮崎で開催されました。同実行委員会の報告集より抜粋。

●戦争が起きた時、軍人よりも非戦闘員である老人や婦人やそれに子供達への被害がいつも大きいのです。戦場での子供達の写真を見ると、もしあれが自分の子供だったら、とつい姿を重ね合わせてしまいます。あんな目にあわせたくないと思えばこそ、なぜそのようなことが起きてくるのかを考えさせられ、戦争を起さないための行動の必要性を感じています。今、日本でも、着々と軍備が増強されています。しかしそんな中で、子供達に生命の尊さを教えていくことが大切ではないでしょうか。写真展を見て、難民の子供達があまりにかわいらしくて胸がつぶれてしまいそうです。彼らが日本で教育を受け、そして生活していけるように何か力になりたいと考えます。(33才 主婦)

●難民が生まれてくる理由が問われなければならないような気がします。政治の難しさ、イデオロギーの違いがその背景にあるのではないのでしょうか。インドシナ難民の多くについては、ベトナム戦争の問題を見逃がすことはできないし、大国の支配を糾弾すること抜きには考えられない気がするのです。わが国もベトナム戦争に加担したという意識を深くもてば、難民の受け入れ・定住問題ももう少しよくなるのではないのでしょうか。(41才 国家公務員)

●私も日本敗戦を満州で体験したので、彼らの苦しみがよくわかります。特に、仕事がないということ

は一番辛いことです。現在、日本でも仕事が少なくなっていますが、何とかして彼らに仕事を探してあげたいと思います。(68才 無職)

●難民に対するかわいそうな、悲惨なイメージがなくなりました。難民の人達と1対1の人間としてつきあっていこうと思う。

●外国の生の問題を知って、私自身どう対応したらいいのだろうと考える時、初めて私は日本人だったんだと感じた。そして同じ地球、特に同じアジアに住んでいて、これほど生活の違いがあるものだろうかと思う。「水」の貴重さ——水道をひねればすぐに水が出る生活をしている私。まだまだ体では感じられないことだけれど、「水」は欠かせないものなのだ、当然のことを改めて思った。国があり、自国の保護が私達の生活の基盤になっていることも初めて痛感した。この写真展を通じて考えたことをこれから自分自身の生活にどのように反映させていけばいいのだろう。それが私の課題である。

●「どうしてこの子泣いてるの?」「どうしてかな?」と言いながら、写真一つ一つを見て子供の質問に答えたお母さん。——私自身も、写真の内容等把握し、写真展に臨むことが必要だったのではないか、これから地道に勉強しながらやっていきたいと思えます。(上記の3人は、いずれも実行委員)

JVC NEWS

●バンコクでJVC総会開く

1982年の活動決算報告ならびに、83年に向けてのJVCの活動を総括する。JVC年次総会が去る12月13日から12月19日にかけて、タイ・バンコクのJVCオフィスで行なわれた。会議では、タイ国内の難民問題の長期化、国際的な難民問題の変化、日本国内の資金問題と言ったJVCを取りまく現状を把握した上での今後の活動方針および組織運営に集中した。

タイ国内での難民救援活動が退潮していく中で、

徐々にタイ国内の地域開発(local development)へのプロジェクトの移行、インドシナ地域以外での難民救援活動の拡がりについて討議された。今後日本での活動の拡がりの基盤づくりのため、規約の作成、ならびに後援会の発足などが決議された。総会で確認されたJVCの活動の「目的」は次のとおり、「本会は、難民及びそれと同様の恵まれない境遇にある人々に対する援助を行ない、その基本的人権、人間としての尊厳、人間として基本的に必要とするものが常に保障されること、及び彼らの自立にとって障害となる問題を恒久的に解決されることに貢献することを目的とする。」

JVCの活動は、みなさまからの募金で支えられています

難民救援活動をより充実したものにするため、以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

- **インドシナ難民救援募金** (11月小計 335,307円)
東京事務所を窓口にしてバンコクに送られ、各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。
自動車整備学校への募金 (11月小計 65,000円)
- **ボランティア募金** (11月小計 39,000円)
現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。
- **クロントイ・スラム募金** (11月小計 146,021円)
バンコク、クロントイ・スラム内の図書館および電気工養成訓練所の運営費などにあてられます。
- **テック・スラム奨学金** (スラム児童奨学金)
バンコク市内スラムの児童への奨学金などの学費援助、一口いくらでも可。(11月小計 200,000円)

●レバノン難民救援募金

JVCは、レバノンのパレスチナ難民や戦乱に巻き込まれたレバノンの人々に対し、何らかの形で援助ができないか検討中です。JVC独自の活動、又は現地地で活動している団体を通じて、医療関係の援助に充てる予定です。

送金方法

住所、氏名、募金種目名を必ず明記の上、下記の郵便口座にお振り込みください。

口座番号：東京 9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

※ 会計の都合上、「Trial & Error」の購読申し込みとは別にご送金くださるようお願いいたします。

編集後記

●ウボンキャンプが閉鎖され、また国境の教育援助、パナニCOMのレクリエーションもそれぞれ状況の変化に応じて活動が打ち切りとなった。ボランティア達も、帰国したりまた新しいプロジェクトに取り組むなどそれぞれの方向を選んでいる。

JVCは昨年の総会において今までの活動をふり返り、今後の活動の方針について充分な話し合いが持たれた。次回にまとめて報告したい。

●アメリカ・カナダなどこれまで多くの難民を受け入れてきた国々が、人数ワクを減らしつつある。その背景には世界的な不況と失業問題がある。その結果、キャンプや一時庇護国にとどまっている難民たちの滞在期間が長びくことになる。日本にとっても決して人ごとではない。

ファイナダー

表紙写真 UNHCR提供 撮影 T. Hansson

ラオスの山岳民族、モン族のハンディクラフト(手工芸品)センター。刺しゅう、パッチワーク、ろうけつ染などを組み合わせた見事な作品も多い。すべてが女たちの手仕事。

北タイのバンビナイ、難民キャンプにて

お知らせ

●本年よりJVC東京事務所の業務時間は平日は午前9時～午後9時、土曜は午前9時～午後1時まで、日曜祭日は休みとなります。

●今号より表記をクロントウーイ→クロントイ、パナニCOM→パナニCOMといたします。

●年末年始の休みと、バンコク総会の影響でTrial & Errorの発行が遅れたことをお詫び致します。現在、Trial & Errorの内容刷新のため準備中です。つきましては次の2月は休刊とさせていただきます。悪しからずご了承下さい。

●Trial & Errorについてみなさまのご意見ご感想を聞かせていただきたく存じます。アンケートにご協力をお願いします。

●キャンペーン「アジアの貧困を考える

— 草の根づくり」について

クロントイ・スラムで活動しているJVCの福村・高塚ボランティアが1月末に帰国します。二人は全国を歩いて、クロントイでの活動報告を行い、スライド上映などをまじえて、アジアの貧困の問題を参加者と語り合う計画です。2～3月にかけて、各地の地域活動団体、ボランティア・グループなどをたずねる予定です。詳しくは東京事務所まで。

TEL. 03 (316) 3253 担当；荻野

JVCとは

Japanese Volunteer Center は1980年2月、タイの首都バンコクで設立された民間救援団体です。

1979年の暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から救援に駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり、現在の組織の原形ができあがりました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など、欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが、現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により、独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは、難民、そしてそれと同様の窮境にある人々に対し、できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが、タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや、バンコクのスラム街において活動を続けています。

また'82年に入ってから、タイのみならず、カンボジア国内での井戸掘りやシンガポールでの活動を始めました。

東京事務所は、こうした活動の情報、人材、資金を現地と結ぶ日本の窓口として機能しています。



発行所 JVC東京事務所
 〒166 東京都杉並区阿佐谷南
 1-1-5 三笠ビル3F
最寄駅 丸の内線新高円寺駅
TEL 03 (316) 3 2 5 3

バンコク事務所 *Japanese Volunteer Center*
 67 South Sathorn Road
 Bangkok, Thailand
TEL 286-4857

京都連絡事務所 京都市上京区寺町今出川角
 光月堂2F TEL075 (256) 1382
 〈海外ボランティア情報センター内〉

昭和58年1月20日発行
 毎月20日発行

発行人 星野昌子

編集人 本橋 栄

表紙撮影 UNHCR提供

裏表紙撮影 加藤明彦

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

「Trial & Error」年間購読申し込み方法

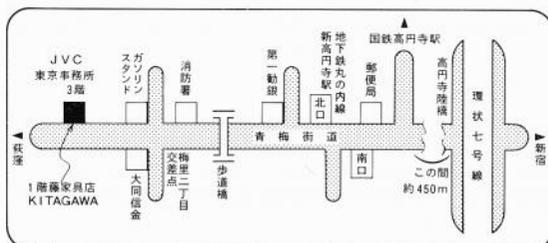
一般購読者 1口 3,000円 (1冊送付)

賛助購読者 1口 10,000円 (4冊送付)

郵便口座番号 東京3-54186

加入者名 JVC東京事務所

住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。



定価 1部300円